『法華百座聞書抄』の動詞の表記（一）

窪田恵理奈

一　はじめに

片仮名文について、小林（一九七一）は、漢字の交用の度合いに応じて漢字を主体とするものと仮名を主体とするものとの二類に分けている。この分類によると、『法華百座聞書抄』（以下、「本書」と呼ぶ）は片仮名を主体とする片仮名文となる。しかし、その片仮名文の書かれかたも、資料によって様々であり幅がある。何が漢字で書かれて、何が仮名で書かれるのか、あるいは、どのような場合に漢字が用いられて、どのような場合に仮名が用いられるのかが問題となる。資料を細かく観察することによって、片仮名文の表記のシステムを検討し、当時の書写者に共通してうかがえる表記意識を探ることが必要となる。この課題に対して、本稿では、本書に現れる動詞の表記を取り上げ、そこに見られる漢字と仮名との選択の要因を探ることを目的とする。

筆者はすでに、拙稿（二〇〇四）で、漢字片仮名交じり文の観智院本『三宝絵』における漢字と仮名の使い分けに関して品詞ごとの特徴を明らかにした。その際、動詞を主とする用言は、宣命書される上巻は漢字表記が中心であり、漢字片仮名交じり文である中下巻は仮名表記が中心であることを指摘した。片仮名文における漢字と仮名の使い分けの展開を知るためには、観智院本『三宝絵』の調査をふまえつつ、さらに多くの片仮名文の実態を把握する必要がある。本書に関する調査はこの一環である。

本書の動詞の表記に関する先行研究には、田島（一九八二）・（一九八三）が挙げられる。田島（一九八二）では、活用語の送り仮名について連用形の送り仮名の表記率が高くなっていることと、その原因がサ変動詞と敬語にあることを指摘した。また、田島（一九八

三）は、すべての活用語において仮名表記は漢字表記に対して三・八倍の用例数を有することと、活用語で使用される漢字には一般的なものが多く見られることとを指摘した。本稿は、本書に用いられる動詞について、本動詞と補助動詞を分けた上で、どのような語が漢字表記をとり、また仮名表記をとるのかについて検討する。

なお、資料は、山岸徳平解説『法華一百座聞書抄』勉誠社文庫四、勉誠社、昭和五一年三月）所載の影印とし、必要に応じて同書の開題ならびに小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』（武蔵野書院、昭和五〇年三月）を参照した。

一　本書における動詞の表記概観

ここでは、本書に現れるすべての動詞について、左記の分類に基づいた表記の概観を示すことにする。この分類に関する説明は、拙稿（二〇〇四）に示している。

Ⅰ　「漢字のみの表記」「仮名のみの表記」「交ぜ書き表記」のいずれか一通りで表記される語

Ⅰa　常に「漢字のみの表記」による語

Ⅰa—①　一種類の漢字を用いる語

Ⅰa—②　複数種類の漢字を用いる語

Ⅰb　常に「仮名のみの表記」による語

Ⅰc　常に「交ぜ書き表記」による語

Ⅱ　「漢字のみの表記」「仮名のみの表記」「交ぜ書き表記」が並存する語

Ⅱa　「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」が並存する語

Ⅱa—①　「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語

Ⅱa—②　「漢字のみの表記」で複数種類の漢字を用いる語

Ⅱb　「漢字のみの表記」と「交ぜ書き表記」が並存する語

Ⅱb—①　「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語

Ⅱb—②　「漢字のみの表記」で複数種類の漢字を用いる語

Ⅱc　「仮名のみの表記」と「交ぜ書き表記」が並存する語

Ⅱd　「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」と「交ぜ書き表記」が並存する語

Ⅱd—①　「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語

Ⅱd—②　「漢字のみの表記」で複数種類の漢字を用いる語

なお、ここで動詞を取り出すにあたっては、原則として、漢語サ変動詞・和語サ変動詞を含む複合動詞、複合形容詞は、複合動詞・複合形容詞として扱わず、単独の動詞の形で切り離して数えた。同一の語が、本動詞と補助動詞[1]として用いられている場合は、それぞれ別語として扱った。本書ではサ変動詞「ス」に助詞「テ」が接続した「シテ」には合字で表記される例があるが、ここでは「シテ」に直し、サ変動詞「ス」の例として扱っている。このような基準で取り出した動詞は、【表1】で示した通り、異なり語数四四〇語、延べ語数三二三八例である。

【表1】

分　類	異なり語数	延べ語数	平均使用度数
Ⅰa—①	6（ 1.4）	6（ 0.1）	1.0
Ⅰb	377（ 85.7）	1,758(54.3)	4.7
Ⅱa—①	55（ 12.5）	1,427(44.1)	25.9
Ⅱa—②	1（ 0.2）	37（ 1.1）	37.0
Ⅱd—①	1（ 0.2）	10（ 0.3）	10.0
合　計	440(100.0)	3,238(99.9)	

異なり語数の最も多いのは、常に「仮名のみの表記」による語（Ⅰb）であり、異なり語数全体の八五・七％を占める。次いで、「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」が並存する語のうちの「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語（Ⅱa—①）の一二・五％が続くが、一位の（Ⅰb）とは非常に大きな開きが見られる。このことから、常に「仮名のみの表記」による語が、本書における動詞の表記の中心であると考えられる。

一方、延べ語数が最も多いものも、（Ⅰb）であり、全体の五四・三％を占める。次いで、（Ⅱa—①）の四四・一％が続き、上位二種類で全体の九八・四％を占める。すなわち、本書においては、動詞は常に「仮名のみの表記」による語が主流であり、また、繰り返し使用される語は「漢字のみの表記」による語と「仮名のみの表記」による語が並存する場合が多いということになる。

次の第三節より、本書に現れる動詞について、右で得られた分類ごとに考察を行うことにする。

三　常に「漢字のみの表記」による語

Ⅰa—①　一種類の漢字を用いる語

本書において、常に「漢字のみの表記」による動詞のうち、一種類の漢字を用いる語（Ⅰa—①）は、次に挙げる「うかぶ」「つく」「とどまる」「はむべり」「ふふむ」「ほどこす」の六語六例である。

（1）芙蓉眼浮（フヨウノマナコニウカヘテ）涙ヲ　（ウ343）

（2）母ノマヤ夫人ハ娑婆世界ノ機縁尽テ忉利天ニムマレ給テ　（ウ331）

（3）師子国ノ海ノ岸ニ留　（オ304）

（4）血ニ侍（ハムヘリ）メリ②　（ウ177）

（5）桃李顔含怨ヲ（タウリノカホハセニフクミウラミ）　（ウ342）

（6）サタ王子トシテウヘタルトラニ身ヲ施シ　（ウ44）

（2）「尽テ」、（4）「侍（ハムヘリ）」については、意味・語形で関連のある「つくす」「はべり」が本書に見られ、「つくす」は「漢字のみの表記」が三例、「仮名のみの表記」三例が見られ、補助動詞「はべり」は漢字表記三三例、「仮名のみの表記」一七例が見られる。このことからすると、（2）（4）については、比較的漢字表記しやすい語であったものと思われる。一方、（1）「浮（ウカヘテ）」（5）「含（フクミ）」は、「桃李顔含怨ヲ芙蓉眼浮涙ヲ（タウリノカホハセニフクミウラミヲフヨウノマナコニウカヘテ）」と一続きになっている例で、漢文のように記載しようとする姿勢がうかがえる箇所であり、本書の他の箇所とは異なるものである。（3）「留」は行末に書かれたもので影印では不鮮明であり、語形で関連のある「とどむ」が「トヽメテ」（オ313）の一例しか見られないことから解釈は保留せざるをえない。（6）「施シ」は、意味・語形ともに関連する語を本書に見いだせないため、漢字表記されやすい語か否かは決めることはできない。

以上のことから、本書において常に「漢字のみの表記」による動詞のうち、一種類の漢字を用いる語は、例外的な用例であると言える。

四　常に「仮名のみの表記」による語

Ⅰb　常に「仮名のみの表記」による語

本書において、常に「仮名のみの表記」による語（Ⅰb）は、三七七語一七五八例である。次に挙げる「タテマツル」のように、繰り返し使用される語には、補助的なものが多く含まれている。そこで、本項（Ⅰb）に該当する三七七語一七五八例を、本動詞と補助動詞に分けて示すと【表2】のようになる。

本動詞三五七語一五六七例のうちで延べ語数の高い語は、「ス」二〇二例、「アリ」七九例、「ノタマフ」五八例、「トル」四三例、「カヘル（返）」三五例、「イタル」「オホス（思）」各二二例、「タテマツル」二一例、「オハシマス」二〇例が挙げられる。特に値の大きい「ス」二〇二例については、単独で用いる場合の四一例に対し、複合サ変動詞は漢語サ変動詞一五九例と和語サ変動詞「山ヲクリス」二例とをあわせた一六一例が確認できる。「アリ」「オハシマス」は補助動詞としても現れる語である。このように、繰り返し使用される本動詞には補助的な意味・用法を持つ語が含まれている。

そこで、補助動詞と解釈される二〇語一九一例を挙げると次の通りである。（語の下の数字はその用例数を示す。以下同様。）

タテマツル84　アリ45　マシマス22　ス10　オハス《四段》5

ウ4　オク4　イル（入）《四段》2
ハシム（始）2　キル2　アフ（敢）
1　イマス1　オハス《下二段》1
カク1　サス（止）1　シム1　タフ
《下二段》1　ハツ1　ヤル2　ヲフ
（了）1

これら二〇語一九一例を見ると、特に用例数が多い「タテマツル」や、「アリ」「マシマス」などの一部の語に繰り返し使用されているものがある。「タテマツル」「アリ」「マシマス」は、本動詞の用例も本項（Ⅰb）にそれぞれ、「タテマツル」二一例、「アリ」七九例、「マシマス」二〇例を確認できるため、本書では、本動詞・補助動詞を問わず、常に「仮名のみの表記」がなされる語であると言える。また、本項（Ⅰb）に該当する補助動詞は「タテマツル」「マシマス」「オハス」という敬語の補助動詞以外にも、用例数は少ないながらも多様な補助動詞が見られる。

また、本動詞のうち使用度数が一の語は本項（Ⅰb）に該当する本動詞三七七語の四三％に相当する一六二語が確認できるので、一部の語が繰り返し使用される一方で、一回性の強い語の多くが「仮名のみの表記」をとることも確認できる。

【表2】

	異なり語数	延べ語数
本動詞	357	1,567(4.4)
補助動詞	20	191(9.6)
合計	377	1,758(4.7)

以上のことから、本書において、常に「仮名のみの表記」による語は、繰り返し使用される語が限られており、それは一部の本動詞と補助動詞であるといえる。

五　「漢字のみの表記」「仮名のみの表記」「交ぜ書き表記」が並存する語

五―一　「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」が並存する語

Ⅱa―①　「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語

本書において、「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」が並存する動詞のうち、「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語（Ⅱa―①）は、五五語一四二七例である。この値について、本動詞と補助動詞の別を示すと【表3】のようになる。

【表3】を見ると、本動詞の一語あたりの平均使用度数は二〇・五であるのに対し、補助動詞の平均使用度数は六三・三であることがわかる。第四節で確認した、常に「仮名のみの表記」による語の場合と同様に、補助動詞が繰り返し使用される傾向がある。ところが、本動詞では「仮名のみの表記」が優勢であるけれども、補助動詞では「漢字のみの表記」が優勢である点に相違点がうかがえる。

まず、本動詞の延べ語数の高い語を順に取り出してみると、

云6／イフ152　申ス84／マウス28　見ル32／ミル34　思フ25／

オモフ42　成ル1／ナル60　問フ1／トフ30　説ク26／トク3
罷ル1／マカル24　候フ20／サフラフ3　行ク1／ユク21

となり、「見ル／ミル」で「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」との用例数がほぼ同数である以外は、「いふ」のように「仮名のみの表記」が優勢である。「漢字のみの表記」が優勢となるのは、右に示した語では「まうす」「とく」「さぶらふ」となるが、これら三語の「漢字のみの表記」の延べ語数は一三〇例であり、本項（Ⅱa―①）の本動詞の延べ語数二八五例の半数近くを占めている。このことから、本動詞は常に「仮名のみの表記」による語が優勢であると考えられる

【表3】

	異なり語数	延べ語数		
		漢字	仮名	合計
本動詞	48	285(5.9)	699(14.6)	984
補助動詞	7	295(42.1)	148(21.1)	443
合計	55	580(10.5)	847(15.4)	1,427

延べ語数の括弧内の数字は平均使用度数を示す。

次に示すのは、補助動詞七語四四三例である。

《四段》給フ171／タマフ106　候フ73／サフラフ3　侍リ33／ハヘリ17　御ス6／オハシマス10
申ス7／マウス9　《下二段》給フ2／タマフ4　了ル1／ヲハル1

延べ語数が高い「たまふ《四段》」「さぶらふ」「はべり」のように延べ語数が多いものほど、漢字を指向していることがうかがえる。そして、第四節で確認した補助動詞二〇例と比べると、「仮名のみの表記」による補助動詞は敬語以外に多様な語が見られたのに対し、本項（Ⅱa―①）に該当する補助動詞は、変体漢文の影響を受けたと思われる「をはる」以外はいずれも敬語である点で特徴的である。「タテマツル」のような例外はあるものの、概ね、本書で用いられる敬語の補助動詞は漢字表記され、敬語以外の語は「仮名のみの表記」が選択される傾向にあると言える。

右のことから、本動詞で繰り返し使用される漢字、補助動詞で使用される漢字があることがうかがえる。それを示すと次のようになる。

申　見　思　説　候　給　侍

これらの漢字は、同じ片仮名文に属する観智院本『三宝絵』でもほぼ常に漢字表記するものであり（拙稿（二〇〇六）、また「説」は例外となるが、当時の平仮名文でも使用される漢字であることから、当時の漢字使用の一般的な傾向を反映したものと考えられる。[3]

以上、本書において、「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」が並存する動詞のうち、「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用い

る語は、本動詞は「仮名のみの表記」がなされることが優勢であるのに対し、補助動詞では「漢字のみの表記」がなされることが優勢であることがわかった。そして、その一部の本動詞や補助動詞で使用される漢字は、片仮名文・平仮名文に関わらず当時の仮名交じり文で使用されやすい漢字であったと思われる。

Ⅱa―②「漢字のみの表記」で複数種類の漢字を用いる語

本書において「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」が並存する動詞のうち、「漢字のみの表記」で複数種類の漢字を用いる語（Ⅱ―②）は、次に示す「きく」一語三七例のみである。

聞ク13／聞ク1／キク23

これの場合は、「聞ク」は例外であり、基本的には「聞ク」「キク」が本書における表記と言える。

五―二「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」と「交ぜ書き表記」が並存する語

Ⅱd―①「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語

本書において、「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」と「交ぜ書き表記」が並存する動詞のうち、「漢字のみの表記」で一種類の漢字を用いる語（Ⅱd―①）は、次に示す「うけたまはる」一語一〇例のみである。

承ル1／ウケタマハル8／ウケ給1

内訳を見ると、「仮名のみの表記」が八例と優勢であり、基本的には仮名表記を指向したものと考えられる。前節の（Ⅱa―②）の場合と同様に、一語しか該当しないことから、本項（Ⅱd―①）は本書において例外的な場合であると言える。

（7）僧ノイフヤウサテソハイカテカ、ヘラルヘキ承ハソノ楊州トイフナルトコロノキシハコレヨリ九千万里ハカリハ、ヘルラム　（オ127）

（8）ヒシリイトオソロシクアハレニテサウケ給ヌ　（オ255）

また、「漢字のみの表記」と「交ぜ書き表記」の例については、（8）の場合、漢字表記で多用される「給」が使用されている。この交ぜ書き表記は観智院本『三宝絵』にも、平仮名文にも多く見られるものであり[③]、片仮名・平仮名に関わらず仮名交じり文で使用されやすい表記であることがうかがえる。

七　まとめ

以上、本稿では、本書に見られる動詞を対象として、漢字と仮名とをどのように使い分けているかを調べ、次の点を明らかにした。

①　本書に見られる動詞は、常に「仮名のみの表記」による語が中心である。この中で繰り返し使用されるのは一部の本動詞と補助動詞である。ただし、一回性の強い語も多く含む。

② 「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」とが並存する語は、本書において繰り返し使用される語に多く見られる。それぞれ例外はあるものの、本動詞は「仮名のみの表記」が中心であり、補助動詞は「漢字のみの表記」が中心である。

③ 漢字表記に使用される漢字は、他の片仮名文・平仮名文でも使用される漢字である。

①・②について、補助動詞を取り上げてみると、「たてまつる」のように「仮名のみの表記」を指向する語や、「さぶらふ」のように「漢字のみの表記」を指向する語など、漢字を用いるものと仮名を用いるものという二つの方向を明らかにすることができた。なぜこのような二つの方向が見られるのか。それは、③で示したように、表記体を問わずに漢字表記されやすい語と仮名表記されやすい語との傾向が反映されたからであると考えられる。本書で漢字表記されやすい漢字の多くは、当時の片仮名文・平仮名文に広く用いられる漢字であることから考えると、様々な表記体に共通して用いられる漢字使用のつながりがあったことを示していると推測される。本書で例外的に、常に「仮名のみの表記」をとる「たてまつる」が、平仮名文においても多く仮名表記が優勢であるという傾向が見られることは、このことを裏書きしているのではないだろうか。

本稿では、単語を短い単位で捉え、漢字と仮名の使用を実態として捉えることを中心として検討した。しかし、このままでは、なぜ「漢字のみの表記」と「仮名のみの表記」とがそれぞれ選択されたのか、その要因を求めるには不十分である。今後はそれぞれの表記の要因を、文節あるいはそれよりも長い単位でみた場合に、どのように漢字と仮名が選択されるのか、その環境と要因について取り組むことを課題としたい。

注

① 補助動詞の認定基準は次の通りである。
イ 形容詞連用形・形容動詞連用について「ある」の意味を表す動詞。
ロ 体言について指定（「……である」）の意味を表す。
ハ 動詞連用形または「動詞＋助動詞」の後について敬意を表す動詞。
ニ 「動詞未然形＋むとす」の形で使用されるサ変動詞「す」。
ホ 「動詞連用形＋て」につく動詞。
ヘ 動詞連用形の後につく動詞で、本来の実質的な意味を失い、直前の動詞の意味を補う動詞。

② 実際にはこの「はむべり」は、「ハムヘリ」が「侍」の右下に書かれている。「侍」に接続する助動詞「メリ」は「ハムヘリ」の「ム」の横から書き始められていて、ふりがな「ハムヘリ」と助動詞「メリ」の字の大きさは変わらない。また、本稿では別語として扱ったが、「はむべり」が「はべり」と別語だと当時意識されていたかどうかにも疑問は残る。

③ 平仮名文における「申」「見」「思」「説」「候」「給」「侍」の使用例として、本書と書写年代が近い『源氏物語絵巻』詞書、梅沢本『栄花物

語』における用例数を索引を利用して参照した。索引で参照した項目は「まうす」「みる」「おもふ」「とく」「さぶらふ」「たまふ」「はべり」である。用例数を挙げるにあたり、補助動詞の用法のあるものは、本動詞の例数と補助動詞の用例数とを合算することとした。なお、参考として、片仮名文の観智院本『三宝絵』における用例数も示す。（用例数は、「漢字表記の用例数／総数」で示す。）

	『源氏物語絵巻』詞書	梅沢本『栄花物語』	観智院本『三宝絵』
申	2／2	516／532	86／95
見	1／37	73／657	101／207
思	1／29	335／633	101／162
説	なし	0／6	44／65
候	0／4	67／323	5／8
給	3／240	7544／8619	389／421
侍	0／37	215／291	1／1

一部に用例の見られないものもあるが、右に示した漢字が繰り返し使用されやすいことがうかがえ、本書で見られる傾向と同様であるといえる。参考として挙げた観智院本『三宝絵』においても同様である。

また、本書で常に「仮名のみの表記」をとった「たてまつる」についても右と同様に確認してみると、左記のように、漢字表記される例が非常に少ないことがわかる。このことも本書と同様に「仮名のみの表記」を指向するものと考えられる。

奉	0／20	59／1362

参考文献

小林芳規（一九七一）「中世片仮名文の国語史的研究」（『広島大学文学部紀要』特輯号三）
田島清司（一九八二）「『法華百座聞書抄』の表記法―表記法の変遷」（『九州大谷国文』一一）
田島清司（一九八三）「『法華百座聞書抄』の表記法（二）」（『九州大谷研究紀要』九）
拙稿　（二〇〇四）「観智院本『三宝絵』における自立語の表記について」（『同大語彙研究』六）
拙稿　（二〇〇六）「観智院本『三宝絵』における交ぜ書き表記」（『同大語彙研究』八）

〔付記〕本稿は、平成一八年度同志社国文学会秋季研究発表会（一一月一九日）における口頭発表に基づいている。発表内外で貴重な御意見をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。